３・11大震災に思う

岩内古宇郡医師会　会長
石山内科循環器科クリニック　院長
石　山　直　志

まず東日本大震災の犠牲者に深く哀悼の意を表するとともに、避難所や仮設住宅などで不便な生活を強いられている被災者の皆様にお見舞い申し上げます。

この度の大震災は、地震、津波、原子力発電所（原発）事故、さらには原発に絡んでの風評被害と、四重に及ぶ。前二者は天災として異論はないものの、後二者は人災と考える。

小生の所属する医師会は、その地域内に原発を要するが故に、福島第一原発事故には重大な関心を持って注視している。事故当初から、当事者の口からは「想定外」なる言葉が度々発せられた。しかし歴史をひもとけば、今回ほどの強度の地震でなくとも、高さや到達距離は今回並みだった津波の記録が存在するという。人間は自然の一部であり、歴史に対しては謙虚であるべきと痛感する。

風評被害についても、情報発信源が一元化されておらず、これまでに蓄積された知識と経験に基づいた正しい情報が伝えられていないことが原因だ。放射性物質の影響は、特に成長期にある子どもたちに大きい。地震、津波だけの被災地は、漸次復興していくだろうが、原発がかかわった被災地は、人も土地も長期的な見守りが必要だ。

また、原発については今後の日本のエネルギー問題にもつながる。これを機に新規の原発建設はなくなり、既存のそれは順次耐用年限を迎え廃炉となってゆく。新たな電源を何に求めるかは喫緊の課題である。

現代社会はあまりにも便利になり過ぎた。蛇口を捻れば湯水は出るし、リモコンひとつで電化製品は動く。しかし、一度断水、停電が起きるや、瞬く間に生活基盤は崩れる。われわれが日々使用する医療機器も同様である。「天災は忘れた頃にやって来る」ではないが、現代人は便利に慣れ過ぎ、「死」さえも日常から遠ざけよう、忘れようとする傾向が垣間見られる。「てんでんこ」の教えのように、物心ついた時から「自分の命は自分で守る」という最も基本的な哲学を繰り返し教育することが、これからの防災教育に求められよう。

被災地の一日も早い復興と、被災された方々の心が時間を要してもゆっくりと回復されることを切望する。

原発事故を踏まえ道医にお願いしたいこと

札幌市医師会中央区東支部
田代内科・呼吸器科クリニック　院長
田　代　典　夫

あらためまして今回の震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

３・11からすでに２ヵ月が経とうとしているのに、長期化する原発事故問題が暗い影を落としているため、復興への光が見えてきません。

今回の事故を他山の石とすべく、道も北海道地域防災計画および泊発電所周辺地域原子力防災計画を見直すそうですが、ぜひそこに医療の専門家として参画し、道医として被曝時医療への積極的な提言をしていただきたい。なぜなら、現在の防災指針では泊原発の放射能漏れ事故発生時に緊急医療本部を結成し、１次医療としては被曝線量チェックなどの初期検査を行うことになっていますが、急性障害を生じるほどの大量放射能漏れが起きた場合に、それがこれまでの訓練通り原発から２kmしか離れていないオフサイトセンターで果たしてできるのかが懸念されるからです。

また、防災計画では福島のように長期にわたる放射能漏れは想定しておらず、スリーマイルと同じせいぜい７日間程度の総被曝線量しか考えていないため、半径10kmの外側では防護対策は必要ないとまで記されていますので、長期被曝が内部被曝のリスク増大につながる可能性を近隣郡市医師会と慎重に協議し、避難区域の設定にもかかわっていただきたい。また２次医療・３次医療圏への被曝者搬送についても送る側、受け入れる側双方の放射線防護体制なども改めて協議し、その指針を道医会員が共通して理解し対処できるように広報していただきたいと思います。

これまで原発存続問題は、イデオロギーの相違や国家的とも言えるコングロマリットの存在に阻まれオープンな議論ができなかった気がしますが、この２ヵ月で状況は一変しております。現代医療を行うためには多量の電気エネルギーを必要とすることは十分承知しておりますが、この際、今後理事会で議論を重ねていただいた上で、英断を以って、他の医師会に先駆け代議員会の決議文に原発の停止・廃止を盛り込んではどうでしょうか。